

# 家庭部会

研究主題 生活力を育む指導の在り方

—生徒による授業評価を生かした授業の改善—

## I 主題設定の理由

「生きる力」を培うことを基本として改訂された学習指導要領は、今年度から学年進行で実施された。家庭科で目指すものは、これまでも重視し、実践を積み重ねてきた「家庭生活を営むために必要な衣食住や消費生活などに関する知識・技術を総合的に身に付けること」である。さらに、社会の変化の激しい今、少子高齢化や男女共同参画社会等の進展に対応し、男女が協力して家庭生活や地域の生活を創造する能力と態度の育成も極めて重要である。

換言すれば、生徒一人一人が自立して生活を送り、そのための目的や方法、価値を把握できることが求められているのである。また、変化する現代において、生活の質の向上を目指す確かな生活観を持ち、自己の生活に対する評価や批判のできる力も必要である。

「東京の教育21」開発委員会家庭部会では、衣食住や消費生活などに関する基本的な知識や技術を確実に身に付け、生徒が自立した生活ができるとともに、地域の生活にかかわり創造する力を、「生きる力」の育成とかかわって「生活力」と定義した。生徒の実態や生徒を取り巻く環境の変化に着目すると、一人一人の生徒が確実に「生活力」を身に付けていくことが求められる。

そのため、高校時代には確かな判断力や豊かな創造力を持ち、これからの社会の中でよりよく生きようとする方法を追求する体験や経験が必要である。また、豊かな人間性を育むためにも、生活に関する事象を体験を通して学び、社会との関係を理解することが大切であり、このことを通して、アイデンティティの確立にもつながる。

一方、平成16年度より全都立高校で実施される「生徒による授業評価」をふまえ、また、これまでの本部会における評価方法の開発と活用方法の研究成果を生かし、授業改善のための方策を研究することにした。生徒による授業評価がより効果的に実施され、授業改善に生きて働くために、本部会では、生徒の自己評価能力を高める「生徒による自己評価」を同時に実施した。また「生徒による授業評価」にも、評価規準を活用することが重要である。そこで、この両面から相互的な評価活動を行うことにより、授業並びに評価の改善に生かすことができると考え、上記研究主題を設定して、研究を行うこととした。

## II 生活力を育む評価の方法

### 1 家庭科における「生徒による授業評価」の実施状況調査と分析

#### (1) 回答校数及び回答人数

学校数 148校（普通科104 家政科8 商業科13 工業科19 農業科1 国際科1 総合学科2）  
人数 200名

#### (2) 調査時期 平成15年6月

#### (3) 調査方法 都立高校家庭科担当教員を対象にした質問用紙による記入式回答

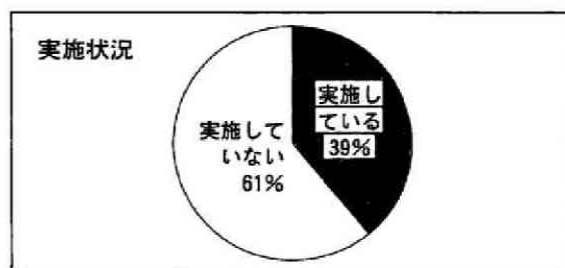
#### (4) 集計結果と分析

##### ア 「生徒による授業評価」について

##### (7) 「生徒による授業評価」の実施状況

授業評価を行っている教員は全体の約4割であった。家庭科では、これまでも授業評価を行っている教員が多く、授業内容の理解度を知る方法として活用されている。

授業評価を行うための評価用紙の作成は、授業担当者43%、教科27%、学校全体15%の順に高く、学校運営連絡協議会等における評価委員会によるものは9%であった。また、全体の7割が家庭科において評価用紙を作成している。この結果から、家庭科として独自の授業評価を行っていることが考えられ、授業改善に生かそうとする姿勢が見られる。



### (イ) 実施時期とその内訳

授業中における実施率は55%、授業以外での実施率は45%であった。

授業中の実施では、学期末の実施が約4割と最も多く、次いで学年末、毎時間ごとの順である。毎時間行っている教員は、ワークシート等を活用して実施している。授業以外の実施では、定期考査時に行っている場合が約6割である。

### (ウ) 実施形態とその方法

実施形態は、「評価用紙を用いて行う」が約5割で最も多く、次いで「テストの中で行う」、「ワークシートの中で行う」の順である。

これは、実施時期との相関関係が見られる。評価用紙やテストの中で行う場合は、学期末に実施し、ワークシートの中で行う場合は、毎時間の授業の中で実施していると考えられる。

### (エ) 実施回数

実施回数は、年間で3回行っている場合が最も多く、次いで1回、2回の順となっている。これは、実施形態の違いによって、その回数も異なるものと考えられる。

評価調査方法は自由記述式が約5割と最も多い。段階別式は約3割が実施しており、その中では5段階による評価方法が最も多かった。

### (オ) 評価項目

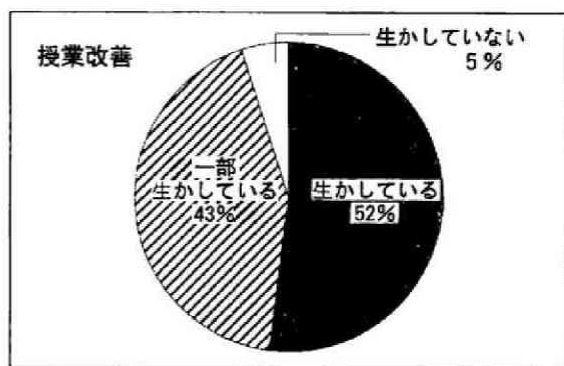
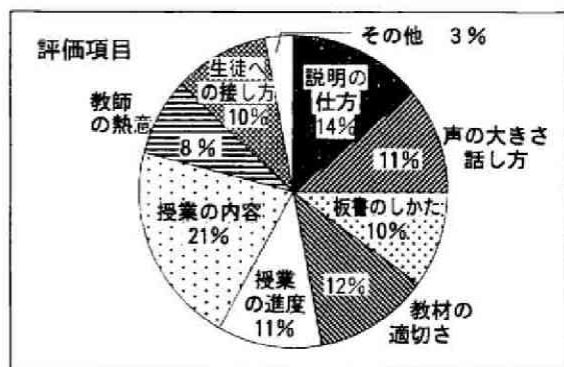
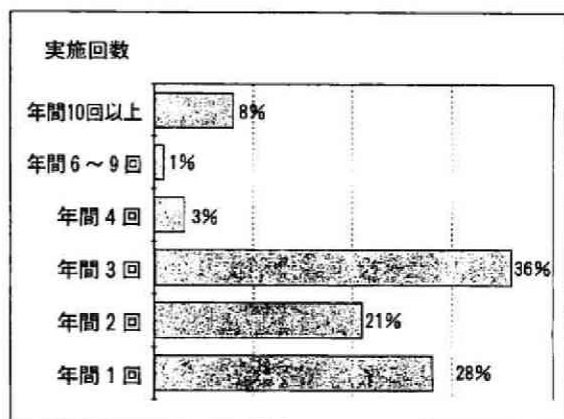
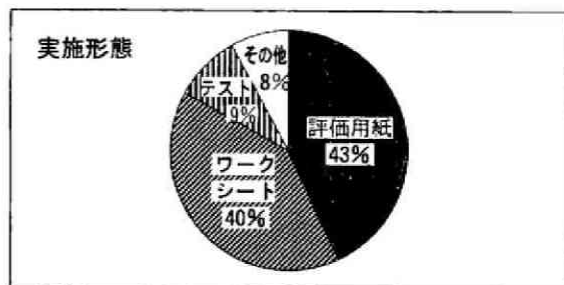
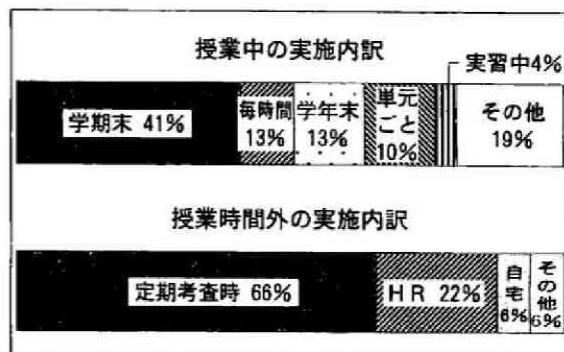
評価項目を分類すると、指導内容に関するものが40%であり、指導方法に関するものが35%、授業への取り組み方と生徒への接し方がそれぞれ10%であることが分かった。その項目には、大きな偏りがなく、ほぼ共通した項目を設定していることが分かった。

### (カ) 評価結果の提示と授業改善への活用

評価結果を提示している教員は5割であり、提示先の大部分は生徒である。提示している教員の中には、評価結果の一部のみを提示している場合もあった。提示方法としては、口頭で生徒に伝えている場合が多い。

提示していない教員も5割おり、提示していない理由については、個人の参考にする、必要性を感じない、時間が取れない、提示する機会がない等が挙げられた。

授業評価を行っている教員のうち、それを授業改善に生かしている教員は95%であった。具体的には、授業や進度のレベルを調整した、生徒から理解しにくいとあった箇所を改善した、教材を生徒の実態に合わせている、次年度の授業計画や授業展開を改善した等があった。



## イ 「生徒による自己評価」について

### (7) 「生徒による自己評価」の実施状況

自己評価を導入している教員は全体の半数おり、授業評価の実施率より高い。これは、「生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる。」という教科の目標達成において、生徒自身の取組み状況を把握するためであると考えられる。

#### (イ) 実施時期とその内訳

授業中における実施率は84%、授業以外での実施率は16%であった。

授業中の実施では、単元ごとの実施が約3割、毎時間ごとの実施が約2割であった。授業以外の実施では、定期考査時に行っている教員が約半数を占めている。

#### (ウ) 実施形態とその方法

実施形態においては、評価用紙とワークシートでの実施がそれぞれ4割を占める。

評価用紙の作成は、教科と授業担当者の割合を合わせると80%となり、授業の実態に応じた評価の工夫を行っていると考えられる。

#### (エ) 実施回数

実施回数は1回、2回、3回がそれぞれ2割ずつを占める。年間で10回以上実施している教員も2割以上いることが分かった。

評価方法は5割の教員が段階別評価で行っており、自由記述式は約3割であった。段階別評価では、5段階評価が最も多かった。

#### (オ) 評価項目

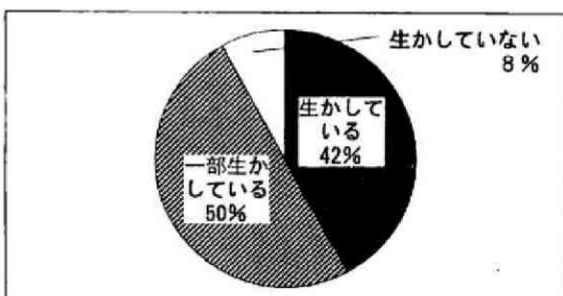
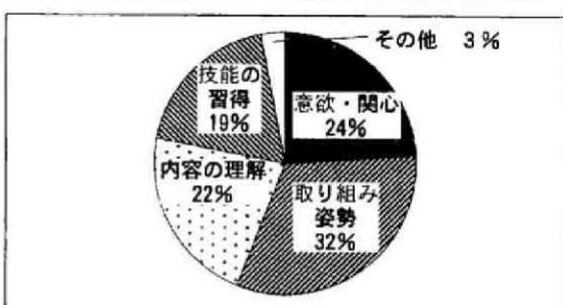
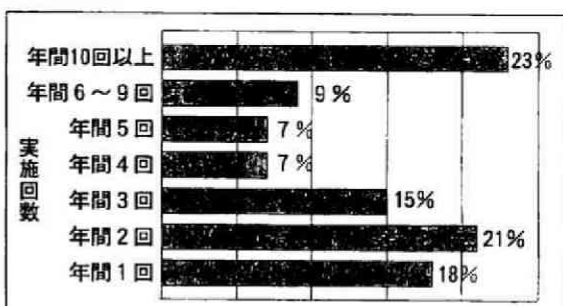
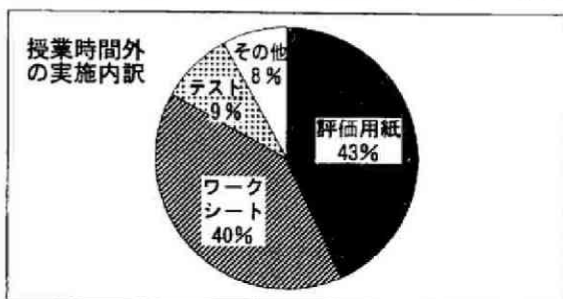
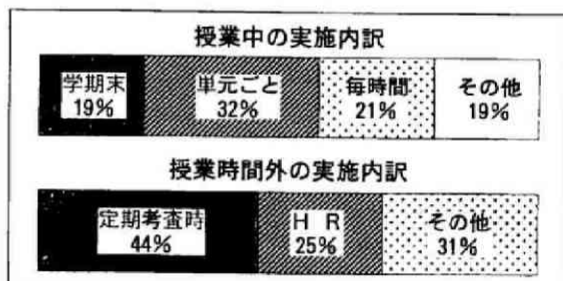
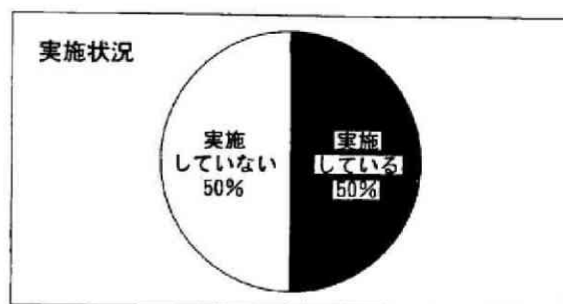
項目を分類すると、「方法の理解」にあてはまる意欲・関心や、内容の理解が45%を占める。また、「目標の認知力」を測るための取組み姿勢が3割を占め、「達成状況の認知力」を測る技能の習得は約2割程度である。

項目内容には、大きな偏りがなく、ほぼ共通した項目を設定していることが分かった。

#### (カ) 評価結果の提示と学習状況の改善

評価結果を提示している教員は約4割である。コメントをつけて返却したり、個人の反省に生かされている。自己評価を行っている教員のうち、一部生かしているものと合わせると、92%がそれを授業改善に生かしている。

「自己評価を行うことによって、生徒に授業改善の様子が見られた」という回答が5割を占めた。具体的には、自己の振り返りができる、友人との差を認識してやる気になった、目標の達成に努力しようとする等があった。



## 2 「生徒による授業評価」の目的と実施

### (1) 「生徒による授業評価」の目的と期待される効果

授業評価を実施することにより、以下のような効果が期待できる。

- ①生徒は、授業の目標を知り、達成すべき目標や目的を理解することができる。
- ②生徒は、教員の授業を客観的に評価することができ、授業の要望等を伝えることができる。
- ③教員は、授業の達成状況を把握することにより、きめ細かで適切な指導・援助ができる。
- ④教員は、授業の評価を通して、授業内容・方法や指導力の向上に役立てることができる。

生徒による授業評価は、評価そのものが目的ではなく、評価結果を出発点とし、教員の授業改善に資することを目的としている。さらに、評価結果を校内研修等で活用し、個々の教員の授業改善を通して、学校全体の教育力の向上を図ることを目指している。

### (2) 「生徒による授業評価」実施における基本的な考え方

生徒による授業評価の実施に当たり、実施目的を生徒に説明し、その結果をどのように役立てるかを明らかにする必要がある。また、家庭科における「生活力」についての意義や必要性及び学習目標を確実に伝えていくことも重要である。「授業評価が授業改善のために実施する」ということや家庭科の目指すものが生徒に理解されなければ、正しい評価結果を得ることはできないであろう。また、生徒一人一人が責任ある評価を行い、その結果に基づいて個に応じた支援が図れるようにするためには、評価用紙は記名式とすることが望ましい。

なお、「生徒による授業評価」の構成要素については、実験・実習や座学に対応できるよう表1に示す、指導内容、指導方法、取組み方、生徒への接し方、生徒の満足度の5項目を設定した。

表1 「生徒による授業評価」

構成要素項目	評価の内容と観点
A：指導内容	授業のねらいと内容の明確化、興味・関心、進め方、理解度 言葉や話し方、時間配分、説明手順、板書の仕方、教材等の活用とその内容、 学習方法 教員の自信と熱意、授業準備、安全確保、発展への示唆、授業改善 生徒把握、公平性、生徒への支援、質問への対応 達成感、充実感、好奇心、楽しさ、生活力の育成
B：指導方法	
C：取組み方	
D：生徒への接し方	
E：生徒の満足度	

## 3 自己評価能力を高める評価方法

### (1) 自己評価能力の育成と自己評価

自己評価能力とは、自ら自己の学習活動とその成果を判断し、特定できる能力のことである。言い換えれば、生徒自身が自分で学習目標を設定し、自分の学習能力を判定して、次の学習に役立てることのできる能力のことであり、課題解決学習を有効に展開するために重視されてきた。この能力の育成のためには、学習目標や学習の進み具合、自己評価を記録するという練習を繰り返すことが必要である。

ところで、自己評価能力には、表2に示すように、目標の認知力、方法の理解、達成状況の認知力、価値の把握、評価の態度の5項目によって構成される。自己評価能力の高まった生徒の姿とは、「自分自身を的確に捉え、自己の生き方について深く考え、よりよい方向に自らを改善したり、軌道修正することのできる資質や能力を持つ生徒」（平成13年度開発委員会報告書より）と捉えた。これまでも家庭科においては、ホームプロジェクトなどの課題解決学習が実施されており、自己評価も導入しているが、今後はより積極的に自己評価を行い、生徒と教員が共に学習状況を省みながら学習目標を設定し、授業改善をしていかなければならない。このことは、自分自身を高いところから客観視し、「もう一人の自分」に反省を繰り返しながら学ぶことにより、学ぶ側の内面の世界をより高めていくことにつながる。

表2 「生徒による自己評価」

構成要素の項目	評価の内容と観点
a : 目標の認知力	達成すべき目標や課題を知ることができる。
b : 方法の理解	目標や状況・結果に関わる認知及び分析・評価の方法がわかる。
c : 達成状況の認知力	目標達成や課題解決の状況・結果及び方法を知ることができる。
d : 価値の把握	自分自身を評価することの意義や有用性をとらえることができる。
e : 評価の態度	進んで自己評価を行い、自己の向上や成長に役立てようとする気持ちを持つことができる。

(2) 自己評価の授業評価への位置付け

これまで述べてきたように、自己評価は、本研究における「生活力」の育成に必要な一つの方策である。一方で、「生徒による授業評価」の評価項目の設定にあたり、ここに、観点別評価と組み合わせ、関連性を捉えてみた。「生徒による授業評価」については、これまでも学期末等にアンケートなどを通して行っている教員も多く、その根底には「分かる授業づくり」への模索が感じられる。本研究では、それをさらに進めて、教員主体になりがちな授業評価を、客観性の確保や多様な視点の導入という観点から生徒の立場で見直していく方法に取り組んだ。そこで、自己評価を繰り返し行うことにより自己評価能力を高め、生徒と教員の相互的評価活動により生徒の取組み姿勢の改善、教員の授業改善を図ることができる。

表3 効果的な評価方法と評価項目の設定例

分類	評価項目	構成要素	関心意欲態度	思考判断	技能表現	知識理解
授業評価項目	①生活力が身につく授業だった。	A E		○	○	○
	②ねらいが達成された授業だった。	A E		○	○	○
	③身近に感じられる授業だった。	A D	○		○	
	④先生の説明は的確でわかりやすかった。	B	○	○	○	○
	⑤授業の進め方は適切だった。	A B		○		○
	⑥黒板の使い方はわかりやすかった。	B	○			○
	⑦教材等の内容は適切だった。	B	○		○	○
	⑧授業の準備はよくされていた。	C	○			○
	⑨先生の授業への熱意が感じられた。	C	○			○
	⑩生徒への接し方がよかった。	D	○		○	○
	⑪もっと深く勉強したい授業だった。	C D	○	○	○	○
	⑫知りたいことがわかる授業だった。	A E	○	○		○
自己評価項目	①授業に対する準備ができた。	a	○			
	②授業を受ける態度はよかった。	a c	○	○		
	③授業に意欲的に取り組んだ。	b e	○	○		○
	④授業内容がよく理解できた。	a b		○		○
	⑤授業目標を達成できた。	a c		○	○	
	⑥もっと多くのことを学びたいと思った。	e	○		○	
	⑦学習したことを生活に生かそうと思う。	d e		○	○	○

### Ⅲ 指導計画と指導事例

#### 1 「家庭総合」における評価規準と評価の観点

生徒の学習状況を的確に把握し、個に応じた指導の展開を行い、生徒一人一人が確かな学力を身に付けるためには、学習指導要領に基づいた評価規準を作成することが必要である。そのために各学校においては、評価の客観性を高める評価規準の策定を行うことが求められている。本研究においては、下記に示す国立教育政策研究所の中間まとめ(平成15年8月)を参考にして評価規準を作成した。

##### ○普通教科(家庭)教科目標

人間の健全な発達と生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる。

##### ○各科目の評価の観点の趣旨

	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
家庭基礎	人の一生と家族・福祉、衣食住、消費生活などについて関心をもち、その充実向上を目指して意欲的に取り組むとともに、実践的な態度を身に付けている。	人の一生と家族・福祉、衣食住、消費生活などについて見直し、課題を見付け、その解決を目指して思考を深めている。	人の一生と家族・福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な技術を身に付けている。	人の一生と家族・福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識を身に付けている。
家庭総合	人の一生と家族、子どもの発達と保育、高齢者の生活と福祉、衣食住、消費生活などについて関心をもち、その充実向上を目指して意欲的に取り組むとともに、実践的な態度を身に付けている。	人の一生と家族、子どもの発達と保育、高齢者の生活と福祉、衣食住、消費生活などについて見直し、生活課題を主体的に解決するために思考を深め、適切に判断し、工夫し創造する能力を身に付けている。	人の一生と家族、子どもの発達と保育、高齢者の生活と福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な技術を総合的に身に付けている。	人の一生と家族、子どもの発達と保育、高齢者の生活と福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識を総合的に身に付けている。
生活技術	人の一生と家族・福祉、消費生活、衣食住、家庭生活と技術革新などについて関心をもち、その充実向上を目指して意欲的に取り組むとともに、実践的な態度を身に付けている。	人の一生と家族・福祉、消費生活、衣食住、家庭生活と技術革新などについて見直し、課題を見付け、その解決を目指して思考を深め、適切に判断し工夫し創造する能力を身に付けている。	人の一生と家族・福祉、消費生活、衣食住、家庭生活と技術革新などに関する基礎的・基本的な技術を体験を通して身に付けている。	人の一生と家族・福祉、消費生活、衣食住、家庭生活と技術革新などに関する基礎的・基本的な知識を体験を通して身に付けている。

国立教育政策研究所中間まとめ(平成15年8月)より

#### 2 「生徒による授業評価」を生かした指導事例 [事例1]

##### (1) 単元名 消費生活と環境

##### (2) 単元目標

- ア 家計と国民経済の関係や家計の収入と支出について理解し、家計管理の重要性を認識する。
- イ 生活目標達成のための経済計画や予算生活の必要性を理解する。
- ウ 多様な支払い方法や消費者信用について学ぶとともに、生活情報の活用方法や消費者の権利・保護について理解し、自立した消費者としての意志決定力を身に付ける。
- エ 環境保全を目指し、暮らしの工夫と環境負荷の少ない消費生活の実践力を身に付ける。

##### (3) 単元の指導計画 (全8時間)

指導内容	学習活動	評価の観点			
		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
生活を支える経済 (2時間)	家計と国民経済の関係について理解する。経済計画の必要性を理解する。	家計管理と国民経済の関係に関心をもちことができる。生活目標と関連づけて認識することができる。	家計の収入・支出の種類を考えることができる。短期的計画・長期的計画の具体例に気づくことができる。	家計や国民経済に関する資料の読み取りができ、自分の生活設計の経済計画を立てることができる。	収入や支出の構成を分類・説明することができる。経済計画を立てる時の注意点を説明することができる。
消費生活の変化と消費者 (2時間)	消費生活の変化や多様な支払い方法・消費者信用について理解する。	消費生活の変化や自分の消費行動に関心をもちことができる。	キャッシュレス社会・消費者信用についてしくみや課題を考えることができる。	クレジットカードの利用時の利点と問題点をまとめることができる。	生活情報の入手方法や情報判断能力の大切さを理解することができる。

消費者の権利と責任 (2時間)	消費者問題やその施策について理解する。主体的に意志決定できる態度を養う。	消費者問題や消費者保護について関心をもつことができる。	主体的に判断するために消費者の権利と責任を思考しながら消費生活を振り返ることができる。	消費者保護機関や法律についてまとめることができる。消費者問題への対応方法を説明することができる。	消費者の8つの権利と5つの責任を説明することができる。
消費行動と環境 (2時間)	環境問題について理解し環境保全の実践力を養う。	消費生活と環境問題の関わりについて関心をもつことができる。	環境負荷の少ない生活を具体的に考えることができる。	環境に配慮した生活の工夫を実践することができる。	企業や行政との連携を理解することができる。

(4) 題材名 家庭の経済と消費 生活を支える経済

(5) 本時の指導目標

- ア 「生徒による授業評価」を通して本時のねらいへの理解度を分析し、授業改善を図る。
- イ 家計管理と国民経済に関心をもち、家計収支の構成や予算生活の必要性を理解する。
- ウ 家計や国民経済に関する資料を読み取り、生活設計の経済計画を立てられる。
- エ グループでの発表を通して経済計画を立てる際の留意点が説明できる。
- オ 家計の学習を通してその重要性を理解し自立に向けての準備ができる。

(6) 準備 教科書、プリント、ライフイベント等に関するパンフレット、カタログ、資料  
前時に課題として生活に関する費用の予想を各自が立ててくることを連絡しておく。

(7) 本時の指導計画 (評価規準の記号：○関心・意欲・態度、□思考・判断、◎技能・表現、▲知識・理解)

区分	指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入 (5)	・本時の学習内容と目標の説明	・本時の内容を理解する。 ・生活を支える家計について関心をもつ。	・本時の内容を確認させ、本時の授業で何を学ぶのか目標をもたせる。 ・ワークシートに目標を記入させる。	・本時の目標を確認する。(○)・家計に関心をもつ。(○)
展開 (30)	・家計の収支構成 ・国民経済との関係	・家計収支の構成について理解する。 ・社会保険料や税金について知り国民経済との関係を理解する。 ・家計に関する用語を理解する。 ・課題で取り組んできた1か月の生活費やライフイベントの費用の予想を確認する。	・収入と支出の分類をさせ、国民経済との関係を給与明細表から理解させる。 ・実収入、実収入以外の収入、実支出、実支出以外の支出、非消費支出、可処分所得について理解させる。 ・生活設計を立てる際の経済的資源の必要性を理解させる。 ・予想と実際の費用を比較させる。	・給与明細表を読み取ることができる。(▲) ・家計収支の構成が説明できる。(▲)・収支の分類ができる。(□) ・課題を通して具体的に必要な費用の予想を立てることができる。(◎)・グループでの活動方法を理解し積極的に参加できる。(▲) ・資料の活用ができる。(◎)
(15)	・経済計画の必要性 ・グループでの調査活動 進学・結婚・出産・住宅取得・高齢期の生活費用等	・4～5人のグループを編成し、1か月の生活費並びに、ライフイベントの費用を資料等を活用して調査を行う。	・発表を通して効果的なプレゼンテーションの方法を工夫できるようにする。 ・時間や記録に配慮しながら進める。	・グループで協力し、積極的に資料を活用して調べることができるようにする。
(40)	・調査結果の発表	・グループごとに調査結果を発表する。各自で発表内容を記録する。	・短期的計画、長期的計画についての留意点を理解させる。	・記録が取れる。(◎)
まとめ (10)	・まとめ	・経済計画を立てるときの注意点を理解する。 ・次時の内容・準備を知る。 ・授業評価をする。	・次時の授業について説明する。 ・授業評価用紙を回収する。	・生活設計と経済計画の関係が理解できる。(▲)・将来に生かそうと考えている。(□◎)

(8) まとめ

家庭経済の導入では、用語の理解と将来の生活目標の達成にかかる費用について考えさせることが重要である。しかし、生活体験の少ない高校生にとっては、難しい題材といえる。そこで導入時に1か月の生活費を記入させ、重要な部分はワークシート内でキーワードとしてまとめさせることが大切である。さらに、経済感覚を身に付け、1か月の生活費や将来の生活目標の達成にかかる費用を調査することは、経済計画の重要性を理解する上で効果的であった。実際の生活における実践と家庭科を学ぶことによって育まれる生活力は、将来への自立にとって重要な力となる。授業評価の実施は、生徒が漠然と捉えていた暮らしのしくみの理解度が授業前と後の変化を分析することにより、より分かりやすい授業へと改善でき、次の授業に生かすことができることが分かった。

### 3 学習支援の充実を図る指導事例 [事例2]

(1) 題材名 被服製作「シャツ製作」

(2) 本時の指導目標

ア 「生徒による授業評価」を行い、学習支援の必要なに対して重点的な実技支援を行う。支援の効果については、授業終了後の授業評価により確認する。

イ シャツ製作におけるポケット付けの縫製方法を理解する。

ウ 洋裁用具の活用を図り、安全に取り扱うことができる。

(3) 本時の指導計画

(評価規準の記号：○関心・意欲・態度、□思考・判断、◎技能・表現、▲知識・理解)

	指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入 20	<ul style="list-style-type: none"> <li>前時の実習内容の確認</li> <li>本時の学習目標の確認</li> <li>実習時の諸注意</li> <li>アイロン・ミシンの準備</li> <li>進度の確認</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業評価用紙を配布し、先週の授業評価を記入する。</li> <li>本時の内容と目標を確認する。</li> </ul> <p><b>実習の準備</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>前時までの内容が把握できているか確認する。</li> <li>本時の内容を確認させる。</li> <li>裁縫用具を安全に使用するよう指示する。</li> <li>進度と準備の確認を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>先週の内容が把握できている。(□▲)</li> <li>本時の目標を確認する。(○▲)</li> <li>実習の準備ができている。(○□)</li> </ul>
展開 被服実習 65	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポケットの種類・作り方を復習</li> <li>ポケットづくり。</li> </ul> <p>・ポケットつけ実習</p> 	<p><b>ポケットの種類</b></p> <p>↓</p> <p><b>「ポケットの作り方実習」</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ポケットつけ位置の確認する。</li> </ul> <p>↓</p> <p><b>ステップ①</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ポケット口を三つ折りにし、アイロンをかけ、端ミシンをかける。</li> </ul> <p>↓</p> <p><b>ステップ②</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ポケットの周りをしるし通り内側にアイロンで押さえ、左前身頃にしつけ糸で縫いつける。</li> </ul> <p>↓</p> <p><b>ステップ③</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ポケットの周りを端ミシンで縫う。縫う順番に注意する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポケットの種類が理解できているか確認する。</li> <li>左前身頃が理解が困難である学習支援が必要な生徒について注意し、確認する。</li> <li>縫いはじめと終わりは糸を結ばせる</li> <li>学習支援を必要とする生徒が糸先を結べたか、端ミシンが布端から落ちていないか確認する。</li> <li>印をつけるよう指示する。</li> <li>ポケット口は縫う必要がないことに気づかせる。</li> <li>学習支援が必要な生徒に声をかけ、進度を確認する。</li> <li>ポケット口を三角に縫うことを理解させる。</li> <li>学習支援を必要とする生徒が三角の部分が縫えているか確認し、適切な指導助言をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>意欲的に実習に取り組んでいる。(○□)</li> <li>ポケットつけ位置が理解できた。(▲)</li> <li>端ミシン等縫う技術が身についている。(◎▲)</li> <li>糸の始末ができている。(□◎▲)</li> <li>意欲的に実習に取り組んでいる。(○)</li> <li>しるしをつけ、アイロンで押さえられている。(□◎▲)</li> <li>しつけができた。(□▲)</li> <li>ポケット口を三角形に縫うことを理解している。(□▲)</li> <li>ポケットを正しく縫いつけることができた。(◎▲)</li> <li>最後まで実習に意欲的に実習に取り組んだ。(○)</li> </ul>
まとめ 15	<ul style="list-style-type: none"> <li>まとめ</li> </ul>	<p><b>まとめ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ポケットが縫いつけられたか確認する。</li> <li>次時の学習内容を知る。</li> <li>授業評価をする。</li> <li>後片付けをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習支援を必要とする生徒の進度について留意する。</li> <li>授業評価用紙を配布し、記入後回収する。</li> <li>実習用具を片付け、机の周りのごみを拾う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポケットの縫い方を理解することができた。(◎▲)</li> <li>今後の学習に生かそうと考えた。(□◎)</li> <li>片付けができている。(○◎)</li> </ul>

(4) まとめ

1回目の「生徒による授業評価」において、学習支援の必要な生徒が2名いることが分かった。この生徒たちは、「先生の説明は的確で分かりやすかった」「授業の進め方は適切だった。」の項目が共に「1」であった。以後2名の生徒に対して、特に進度を丁寧に確認・指導し、実習時の声かけに努めた。その結果、2回目の授業評価においては、「4」になり、学習支援の効果を得ることができた。今後は、2回目の授業評価で新たに明らかになった、学習支援の必要な生徒への対応と方法が課題である。



#### 4 自己の評価能力を高める指導事例 [事例3]

(1) 題材名 献立と調理 朝食の献立作成

(2) 題材目標

- ア クラス員相互の評価を通して自己の評価能力を高め、学習活動への意欲を高める。
- イ 青年期における1日に必要な食品群別摂取量を理解し、望ましい朝食の献立を考えることができる。
- ウ 予算や廃棄率などを考えた食材の購入計画並びに安全で能率的な作業計画を立てることができる。
- エ 自己の食生活の問題点に気づき、具体的解決方法を理解し、よりよい食生活を営む態度を身につける。
- オ 配膳の仕方や食事のマナーを身に付け、楽しく食事をするための工夫ができる。

(3) 指導計画と指導事例 (全6時間)

指導内容	学習活動	評価の観点			
		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
献立の立て方 (1・2時間目) 献立の作成	献立作成の手順を学ぶ。 これまでの調理実習から、生活活動強度Ⅲ17歳、食品群別栄養摂取量を満たす朝食の献立を作成する。 (実習班作業)	朝食の献立を考えるに当たり、積極的に意見を出し合って授業に臨んでいる。	自己の食生活を振り返り、不足しがちな食品をどのように生かせばよいか考えている。	各班のテーマに合った献立を立てることができる。 班員と連携した作業を行うことができる。	献立作成を理解している。 食品群別摂取量の目安に達していない食品と分量を理解している。
実習の説明と作業計画 (3時間目)	実習に向けての確認 ①次時の学習方法の確認 ②前日の準備内容の把握 ③作業計画 30分以内 ④材料購入計画 予算1,000円以内 購入困難な食材の見直しと変更 ⑤テーブルコーディネート計画 (食器、テーブルクロス、配膳)	評価について関心を持ち、授業に対する意欲を高められる。 実習に向けた打ち合わせを計画的に行っている。	時間内で完成するための調理方法を選択できる。 適切な作業計画を立てることができる。 楽しく、美味しく見える配膳や盛りつけの工夫を考えている。	献立やテーマにあわせた、テーブルコーディネートができる。 食材を予算内で購入できる。 班員と連携した作業を行うことができる。	安全・衛生に配慮した調理方法を理解している。 配膳や食事のマナーを理解している。 食品購入のための鑑別方法を理解している。
本時 朝食づくり (4・5時間目) 点呼 本時の流れ説明 実習中の安全・衛生指導 作品の記録 評価方法の説明 提出物の記入方法と提出に関する指示 次時の説明 教室復元・清掃指導	作業上の留意点の確認 本時の流れ説明 (10分) 朝食献立の実習 (30分)  作品に対する各班の評価 ①個人での評価 (10分) ②個人での評価をもとにしたベスト3選び (15分) 試食・班での評価 (15分) 作業計画表、完成予定図、会計報告、評価表 (個人、班)、ワークシート、授業評価用紙の提出と記入についての確認 次時の内容確認 (5分) 片づけ・清掃終了後、点検を受けて退室 (15分)	身支度を整えて実習に取り組んでいる。 事前の準備に責任を持って取り組んでいる。  積極的な態度で評価活動を行っている。 班ごとに互いの評価結果を分析できる。 意見を出し合い、積極的に参加している。  調理室の衛生に配慮した片付けや清掃ができる。	食品購入にあたり、必要な材料を用意している。 適切な食品の選別ができる。  作品を比較し、参考となる点や問題点の解決を行うことができる。 評価結果をもとに班での評価規準を統一し、作品を選出することができる。	能率を考えた調理技術を身に付けている。 計画通りに作業できる。 配膳や食事のマナーを理解している。 盛りつけ図通りに仕上げられる。  自己の評価内容について説明することができる。	作業内容を理解している。   評価に対する意義を理解している。 他班の献立を評価するにあたり、参考になる点や改善点について考えている。
まとめ (1時間) 評価結果の発表と講評 今後の食生活の在り方について確認	実習班内での意見交換と献立の講評 (班ごと) ①参考になった点 ②他班へのアドバイス ③改善点の発見と具体的改善	評価結果などの他者評価から問題点を見つけ、改善しようとしている。	他者評価を踏まえ、改善点についての具体的解決方法を考えることができる。	各班の改善点の明確化と対策について説明ができる。	評価の結果について認知し課題を理解できる。

#### (4) まとめ

食生活単元のまとめとして、自己の食生活における問題点や課題を発見させ、現在の自分に不足しがちな栄養素の適切な摂取方法を理解させるために、「朝食の献立」を行った。

短時間で、栄養バランスのよい献立と調理計画を立て、食を楽しむためのテーブルコーディネートを含めて考えさせた。また、実習した作品はクラス全員で相互評価を行い、評価結果の発表を通して、他班へのアドバイスをを行った。このことにより、評価の客観性を高め、自己の評価能力を高めることができた。このような評価活動への積極的な取り組みは、自己の学習活動への意欲を高め、問題を発見し、改善しようとする能力の育成につながった。

### IV まとめ

今年度家庭部会では、「生活力を育む指導の在り方—生徒による授業評価を生かした授業の改善—」を研究し、「生活力を育むこと」を研究の柱とした。来年度より全校で実施される「生徒による授業評価」を視野に入れ、生徒の自己評価の導入と評価規準を活用した評価表の作成など、教科のねらいを踏まえた評価方法の開発と研究を行うとともに、授業改善に生かすことを目指した。

そこで、家庭科の特性を踏まえ、評価の観点を生かした指導計画及び指導案の作成に当たり、それについて、3つの事例研究を行った。各事例においては、7月に1回目の自己評価を含む授業評価を実施し、その結果を集計・分析して授業改善を行い、9月には同じ単元で、2回目の自己評価を含む授業評価を行った。結果は右図の通りである。「授業評価」では、本研究の柱とした「生活力が身に付く授業だった」という点では成果が得られた。しかし、「自己評価」からは、学習したことを生活に生かす実践力の育成が課題として残った。また、「自己評価」では、授業改善後、授業への意欲や取り組み等が高まったが、「授業評価」では、「身近に感じられる」「進め方について適切」と考える生徒が若干減少し、授業改善の継続の必要性を感じた。

今回の研究の中で、きめ細かな指導と評価を実施すると、生徒の授業への興味・関心やもっと深く学びたいという意欲が高まり、次年度の家庭科選択者が増加したとの感想もあった。

今後も、観点別の授業評価を活用することにより、教科のねらいを踏まえた評価方法の開発と研究を行うことが必要である。さらに、授業改善に生かす評価表については、各学校における育てたい生徒像や教科における指導形態及び指導方法を踏まえた学校ごとの評価表を開発することが大切である。今後も、教科のねらいを踏まえた指導目標の達成を図るため、適切な評価項目による評価を行い、指導と評価の一体化を目指して研究開発に努めていきたい。

